司馬遼太郎『坂の上の雲』論
――触媒としての雑誌『中央公論』をめぐって――

轟　原　麻　美

一　はじめに

司馬遼太郎『坂の上の雲』は、『産経新聞』夕刊に一九六八年四月二二日から一九七二年八月四日まで全一二九六回にわたって連載された、司馬の代表作として知られる長編小説である。『坂の上の雲』の主人公は愛媛・松山出身の三人である。騎兵隊を作った陸軍軍人・秋山好古、その弟で参謀として活躍した海軍軍人・秋山真之、そして秋山真之と同窓生で俳人の正岡子規を、司馬は主人公に据えた。これら三人の主人公の生涯を描きながら、彼らが生きた明治という時代そのものにも司馬は多くの紙幅を割いた。とくに作品の大部分を占めるのは日清戦争と日露戦争である。日清戦争と日露戦争は、『坂の上の雲』の核だと言うこともできるだろう。これまでの先行研究においては『坂の上の雲』といわゆる「司馬史観」が結び付けられ、主に歴史学の観点から批判がなされてきた。「司馬史観」とは、明治は明るいが昭和は暗いという、司馬の近代史に対する歴史観のことをいう。中塚明は司馬を「明治栄光論」の代表主張者」と位置付けた（注1）。中村政則も司馬の歴史観の問題点は「「明るい明治」と「暗い昭和」という単純な二項対立史観にある」と指摘している（注2）。

しかし、司馬は『坂の上の雲』の連載当初から、明治と昭和とを対立させていたわけではないと考えられる。『坂の上の雲』の連載前にあたる一九六四年二月に、司馬は「百年の単位」（『中央公論』第七九巻第二号）という随筆のなかで、「大東亜百年戦争説」について「おもしろく読ませてもらった」と言及した。「大東亜百年戦争説」とは、「百年の単位」と同じく『中央公論』に掲載された、林房雄の「大東亜戦争肯定論」のことである（注3）。「大東亜戦争肯定論」とは、開国から「大東亜戦争」までが連

続した「百年戦争」であったと提唱した論であった。司馬は「百年の単位」において、明治維新から「大東亜戦争」までの連続性を認めている。その上で、「大東亜戦争」が終結するまで日本人が持っていた「良質の遺伝子」が何であるのかを追及したいと随筆内で宣言した。すなわち一九六四年の時点ではいわゆる「司馬史観」の特徴は見られず、むしろ戦前と戦後の差異に着目している司馬の姿が捉えられる。このことは、司馬という作家ならびに作品を分析する上で重要だと考える。司馬が『中央公論』に掲載された論評に触発され、日本人の何たるかを解き明かすことを『中央公論』誌上に宣言したことは注目すべきであるし、これらの三つの重なりは、偶然とは考えにくい。本稿ではこうした観点に基づき、作家・司馬遼太郎の動向と、『中央公論』における論壇の動向とを比較検討し、『坂の上の雲』の成立について考察を行っていく。

二　司馬遼太郎と雑誌『中央公論』

一九八五年、司馬は「雑誌言論一〇〇年」というテレビ番組内で、『中央公論』について次のように語った(注4)。

いきなり昭和二十年以後の話から入ります。私は昭和二十年、敗残兵になりました。もともとは満州にいたのですが、非常に不思議なことに、敗戦の少し前に日本に帰っておりまして、栃木県の佐野市で敗戦を迎えました。そのまま汽車に乗って、すっかり焼け野原となった大阪を見ました。

しかし、ぶらぶらしていてもしょうがないと思って、京都へ行きました。京都の河原町通を歩いていきますと、すべて古きものは無価値になっていました。

そのとき、一軒の古本屋に、入りきれないぐらいうずたかく、『中央公論』と『改造』が積んであったのです。これはいいものを見つけたと思いましたね。しかもそのときの持ち合わせで買えたぐらいですから、ほとんど二束三文でした。運ぶのが大変でしたが、帰ってきてそれらをとにかく読みました。私は大正十二年に生まれて、昭和二十年には二十二歳になっていました。しかしまだ子供でした。自分が生まれて、経た時代がわからなかった。

（傍線引用者、以下同）

司馬にとって『中央公論』とは、時代を象徴する雑誌であったと言えるだろう(注5)。

『中央公論』は一八九九年の刊行当初、「誌名の上部に「政治、

文学、教育、宗教、経済」と頭書し」、「時の金権社会に対する批判的態度などを濃くして」いた雑誌であったという（注6）。このような特色を持つ総合雑誌を用いて司馬は時代を紐解いたのだが、司馬が『中央公論』を重視していたのは、敗戦直後だけではなかった。

戦後の『中央公論』は、「論争の場の提供や文芸面の拡充等が企画され（中略）誌上に展開される主題自身の拡散、多様化が著しくなって」いった（注7）。そのような『中央公論』について、一九六一年五月に司馬は随筆「君のために作る」（『放送朝日』八四号）のなかで、

「中央公論」を読むひとと、「平凡」を読むひととは、いずれも大衆だが、まるで「型」がちがう。人間への興味のもちかた、活字への馴れ、知っている言葉の量、教養、職業、社会意識、収入、すべての点でちがいがある。

と『中央公論』を評した。司馬は大衆雑誌のなかでも『中央公論』と、そして『中央公論』の読者を一段高く位置づけている様子が窺える。これは読者の視点というよりは、むしろ書き手の視点であろう。このようなことを書くに至った背景には、随筆「君のために作る」を書く二ヶ月前に、『中央公論』に司馬の随筆が初めて掲載されたという背景が関係していると思われる（注8）。一九六一年以降、『中央公論』に日本史や宗教に関する司馬の論評や対談が掲載されていくようになる。これまで読者であった司馬が、自身も書き手として加わるようになったという点において、一九六一年は『中央公論』との関係性の一つの転換期であったと指摘できる。当然、司馬はこのとき既に他の雑誌などの媒体においても活動していた。しかしながら敗残兵となった司馬が時代の様子を知る手立てとして熟読し、社会意識の高い読者層と論者を擁する『中央公論』に関わるようになり、自身の考えを発信していくようになることは、司馬にとっての分水嶺であったと推測される。

三　『坂の上の雲』執筆準備期間

書き手であるということは、読み手でもある。敗戦直後だけではなく、それ以降も司馬が『中央公論』を読んでいたということは、先に挙げた司馬の「百年の単位」と林房雄の「大東亜戦争肯定論」の関係からも明らかである。しかし司馬は、批判を多く呼んだ林房雄の論旨にはほとんど言及していない（注9）。その代わり、司馬は「百年の単位」のなかで自身の戦争体験を明文化し、それと同時に「良質の遺伝子とは何か、ということ

は、日本の文明を愛する立場で、むろんそれもごく趣味的な立場で考えてゆきたい」と述べた。「大東亜戦争」に関する特集の中に組み入れられたわけでもなく、『中央公論』の随筆欄に寄せられた「百年の単位」は、司馬にとっていかなる位置づけの作品（随筆）であったのか。

随筆「百年の単位」から四年後に、『坂の上の雲』は連載が始まる。連載に先立ち、司馬は「私は、このために日露戦争についてここ五、六年来、できるかぎり調べてきた」と連載予告で書いている（注10）。この司馬の言葉に則るならば、司馬は一九六二年頃から『坂の上の雲』の執筆準備に取り掛かったことになる。随筆「百年の単位」における「良質の遺伝子」とは、「大東亜戦争」の終結によって「どこかへ消えてしまった」、維新史から引き継いできた日本人の性質を示している。この時期の司馬は明治を中心に幅広い時代を舞台として小説を書いていた。したがって、それらの作品はいずれも戦国期や明治維新に活躍した人物を主人公としているため、「良質の遺伝子」の保有者であることは考えられる。しかし、司馬があえて随筆「百年の単位」で言及した論評が「大東亜戦争」を冠していることに注意を払えば、より密で重要な歴史的事項が浮かび上がってくる。それが、日清戦争と日露戦争である。

林房雄は「大東亜戦争肯定論」の中で、「「大東亜戦争」の本質に関する研究と議論は、いろいろな場所ですでに始まっているようだ。『中央公論』だけをとってみても、ここ一年あまり、この問題をめぐる諸家の発言が目立って多くなっている」と指摘した。

たとえば、一九六二年一〇月の『中央公論』（第七七巻第一一号）では、「日本を考える」という特集が組まれている。見出しは、「戦後十七年、祖国喪失状態からの脱却の道は？あらためて問う日本の今日と明日」である。当時の『中央公論』が持っていた問題意識が明確に現れた特集と見出しである。この特集の中で小田実は「三代目のナショナリズム」という論評を書いている。そこでは戦後の歴史教育について日露戦争を取り上げ、「「日露戦争は侵略戦争だ」という決めつけは、客観的・科学的データの不足による一方的論断で」あり、「歴史教育が今後なすべきことは、その客観性・科学性をさらに徹底することによって、そうした一方的なきめつけでない日露戦争の正当な評価を子供たちに教えること」だと主張し、それによって「現在の日本が求めている」、「現実的で同時に理想にみちたナショナリズム」が形成されるとしている。現在の日本を考えるにあたって、小田実の視点は明治時代（日露戦争）を捉えている。

また一九六三年三月の『中央公論』（第七八巻第三号）では特集こそ組まれていないものの、石川達三「心の中の戦争」、大江健三郎「ぼく自身のなかの戦争」、村上兵衛「大東亜戦争私観」という論評が並んでいて、「大東亜戦争」についてそれぞれが検証を行っている。この組み合わせも、「大東亜戦争」とは何であったか、現在の日本はどうすべきかという問題意識に連なっている。三人の論者のうち村上兵衛は「大東亜戦争私観」において、「大東亜戦争」の「徹底的な研究自体が、私たちの今日の生き方を導き、今日の問題に示唆を与える」とし、「歴史をじぶんの歴史として正確に捉えることが、今日の平和問題においても、その思想的基盤となると信ずる」と述べた。一九六〇年代前半は、林房雄も指摘している通り、『中央公論』においては「大東亜戦争」を問い直す時期であったと言えるだろう。『中央公論』における「大東亜戦争」を軸とした論考には、主に二つの型がある。ひとつは、明治期の戦争、すなわち日清戦争と日露戦争を解明することで「大東亜戦争」を分析する方法である。それから、「大東亜戦争」を顧み分析することで、今現在の課題に反映し活かそうとするものである。

それでは、司馬はこの時期においてはどのような傾向にあっただろうか。まずひとつ目の、日清戦争と日露戦争を解明しようとする動きについては、繰り返しになるが、司馬は『坂の上の雲』の執筆準備期間に入っており、しかもこの時期の『中央公論』に目を通しているわけであるから、日清戦争と日露戦争の解明を行う型に当てはまっている。もうひとつの、「大東亜戦争」を介して現代を捉えるという型については、これは随筆に表れていると指摘できる。一九六〇年代から司馬の随筆には、「小説家だから」と前置きしながら、社会に対する言及を行うという特徴が見られるのである。たとえば当時の京都大学総長・奥田東の卒業訓示「卒業しても、酒とマージャン、読むのは週刊誌だけというような人間にはくれぐれもなってくれるな」に触れ、「私などは、本来、世外人であるべき小説書きで、意見などいわないほうがいい」としながらも、「〝だけの人間〟がおびただしい勢いでふえている」と苦言を呈している〔注11〕。

また「新大阪駅での思案―『期待される人間像』をめぐって」（『産経新聞』大阪版夕刊、一九六五年一月二七日）では、同年一月一一日に発表された中央教育審議会の中間答申『期待される人間像』に言及している。そこでは「私は小説家であって、おなじく人間に興味をもつ教育者や政治家とはちがう。だから「おまえはどんな人間像を期待するか」と問われても、答えようがないのである。そう在るような人間を書いているのであっ

て、そうあるべき人間を書いているのではない」としながらも、「期待される人間像という文章のなかで、愛国心のことに触れていた。たしかに大事なことだろう。しかし、一銭のトクにもならぬ行きずりの人間にちょっとした人間なみの態度をとる、ということのほうが、愛国心を説く前に、さしあたって緊急なことだ」と持論を述べている。成田龍一は『坂の上の雲』の執筆後から司馬は「経世的な発言も辞さなくなる」(注12)と指摘しているが、随筆を追っていくと一九六〇年代半ばには既に、経世的な司馬が兆しているのである。

司馬が『坂の上の雲』を描いた背景について、成田龍一は「『坂の上の雲』は、一九六〇年代後半から七〇年代にかけての司馬の問題意識によって書かれた作品」だとした(注13)。問題意識というのは「執筆時にかかわる司馬の認識」であり、作中では「安保闘争後の高度成長期に、その社会を生きるサラリーマンの心性が登場人物の行動や主張と重ね合わせて記され」ると指摘した。社会背景については中塚明も指摘しており、「日本の高度経済成長の気分」に加え「明治百年記念式典」といった社会の熱の影響も大きかったとする(注14)。それらに加えて、『中央公論』における論壇の動きと、司馬の動向には多くの共通点が見られることを重視すべきだと考える。一九六〇年代は司馬が直接的に「大東亜戦争」について語ることは少ない。しかしながら、司馬のまなざしは『中央公論』における論者と同じく、「大東亜戦争」、明治時代(日清・日露戦争)、そして現代社会に向けられている。したがって随筆「百年の単位」は、「大東亜戦争」についての議論の活発な時期の『中央公論』において発表することに意義があったのだと考えられる。

四　『坂の上の雲』と『中央公論』のテクストをめぐって

『坂の上の雲』の執筆準備期間にあった司馬は、明治時代を解釈し描くことによって「大東亜戦争」と社会問題に挑むことを試み、「百年の単位」はその決意表明であったと考察した。つまり、ここまで見てきたことは、作家・司馬遼太郎と『中央公論』の影響関係といえる。そのことを踏まえて本章では、『坂の上の雲』と『中央公論』の内容について検討を行う。結論から言えば、『坂の上の雲』と『中央公論』の論評、それぞれのテクストを比較すると、『坂の上の雲』には『中央公論』からの影響と思われる箇所が散見する。とくに一九六〇年代における『中央公論』に掲載された論評は、『坂の上の雲』の前半部、日清戦争のくだりに影響を与えていると考えられる。

日清戦争については、「戦争がはじまろうとしている」（注15）という文章で書き起こされる。「日本の近代史がはじめて経験した」対外戦争であると触れ、すかさず「日清戦争とは、なにか」と問う。日清戦争の記述で特徴的なことは、作者の日清戦争を解釈するところから始まることである。日清戦争については、司馬は「防衛」のためであって、「清国や朝鮮を領有しようとしておこしたものではなく、多分に受身」な戦争であったと主張する。『中央公論』に掲載された論評においても、ほぼこの趣旨で似通っているように思われる（注16）。たとえば『中央公論』における「大東亜戦争」検証の先駆けとなった上山春平の「大東亜戦争の思想史的意義」（『中央公論』第七六巻第九号、一九六一年九月）では、「幕末から大東亜戦争にいたるまでの段階では、軍備なき国家は国家の否定を意味し、植民地化を意味した。しかるに、軍備をたくわえ、主権国家を確立し、産業革命をやって先進資本主義諸国と利害が衝突するにいたれば、有効な国際機構のない状況下では、戦争にうったえる他に道はなかった」と論じられた。大井魁は「日本ナショナリズムの形成」（『中央公論』第七八巻第七号、一九六三年七月）で「日露戦争には帝国主義的侵略戦争という性格があったのは事実」だと認めつつ、「当時の国際社会を前提として、強大な帝政ロシヤの、中国、朝鮮への進出に対抗して、日本はほかにどんな方途をとり得たか」知れず、当時の日本人を非難できないと述べた。また司馬の決意表明の契機となった林房雄の「大東亜戦争肯定論」（注17）では当然ながら「勝敗を度外においた、やむにやまれぬ戦争」であったと近代の戦争を評価している。司馬の日清戦争観は『中央公論』の論評の流れに沿ったもので、司馬の中で揺るぎないひとつの見解となり、そのために司馬は日清戦争を語り始めるその冒頭から「日本帝国の存亡が賭けられ」た戦争だということを明確に示したのであろう。

このように『中央公論』で展開された論旨と一致する記述がある一方で、司馬が独自の見解を展開している箇所もある。司馬が日清戦争のくだりで提唱したことは、二項対立的史観に対する批判であった。司馬はまず、「進歩的学者たちのあいだで相当の市民権をもって通用した」日清戦争史観を示す。つまり「日清戦争は、天皇制日本の帝国主義による最初の植民地獲得戦争である」、「朝鮮と中国に対し、長期に準備された天皇制国家の侵略政策の結末である」という見方である。ついで、当時の進歩学者らが主張する内容の対極にあたる「清国は朝鮮を多年、属国視していた。さらに北方のロシアは、朝鮮に対し、野心を示しつつあった。日本はこれに対し、自国の安全という立

場から朝鮮の中立を保ち、中立をたもつために朝鮮における日清の勢力均衡をはかろうとした。が、清国は暴慢であくまでも朝鮮に対するおのれの宗主権を固執しようとしたため、日本は武力に訴えてそれをみごとに排除した」という日清戦争観を挙げる。「前者にあっては日本はあくまでも奸悪な、悪のみに専念する犯罪者のすがたであり、後者にあってはこれとはうってかわり、英姿さっそうと白馬にまたがる正義の騎士のよう」だと司馬は指摘した。

司馬の主張するところはすなわち現代の歴史科学の「ぬきさしならぬ不自由さ」であり、歴史家学は「国家像や人間を悪玉か善玉かという、その両極端でしかとらえられない」という指摘であった。「善玉」と「悪玉」に判別するところからスタートする科学は他にないと述べ、その点が歴史科学の「不幸」だとした。つまり司馬は「善玉」と「悪玉」という歴史の識別をしないと、作者の歴史観を打ち出しているのである。そのために日清戦争の「定義づけを、この物語においてはせねばならぬ必要が、わずかしかない」とし、その「わずか」な定義が、二項対立的史観を排除するということであった。司馬の日清戦争観は「善でも悪でもなく、人類の歴史のなかにおける日本という国家の成長の度あいの問題として考えてゆかねばならない」という信念のもとに展開されていくのである。

司馬が見せた歴史科学に対する批判に類似する論評は、『中央公論』には見当たらない。しかし、まったく繋がりがないかというと、そうではない。先に挙げた上山春平の「大東亜戦争の思想史的意義」には、次のようにある。

私たちは、はじめあの戦争を「大東亜戦争」とよんでいた。しかし、いつのころからか、占領軍のよび方をまねて、「太平洋戦争」とよぶならわしになってしまった。それにともなって、戦争にたいする評価にも変化が生じた。

つまり、「皇国日本」が「ファシズム」になり、「鬼畜米英」が「民主主義」になり、「東亜新秩序建設」が「植民地侵略」におきかえられる過程で、しばしば、価値評価が逆転した。こうした変化によって、「皇国日本」や「東亜新秩序建設」の楯の反面が明らかになったことは認識の前進であったが、先進資本主義国と後進資本主義国のナワバリ争いが、「平和愛好国」と「好戦国」もしくはデモクラシーとファシズムのたたかいとして、善玉と悪玉のたたかいにすりかえられた点にごまかしがあった。

鍵語となるのは、「善玉」と「悪玉」である。この鍵語は、数度、上山の論考の内部で用いられている。この引用文は以下に続く。

このようなごまかしは、やがて、朝鮮戦争、アルジェリア戦争、スエズ戦争などの事実によって誰の目にも明らかとなるが、それに先だって、ごまかしを理論的に解きあかす手がかりをあたえてくれたのは、マルクス主義であった。それは、日本と米・英とのたたかいを、帝国主義相互の闘争としてとらえなおす観点を提供した。この観点によれば、日本を善玉、米・英を悪玉とする「大東亜戦争」史観も、逆に日本を悪玉、米・英を善玉とする「太平洋戦争」史観も手前ミソであり、ほんとうはどちらも悪玉にすぎない。こうしたマルクス主義の「帝国主義戦争」史観は、はじめはアメリカ占領軍を解放軍として歓迎した日本共産党の考えなどを反映して、なんとなく「太平洋戦争」史観とむすびついていたが、朝鮮戦争のころをさかいとして、はっきりこれと手をきった。

さらに「大東亜戦争の思想史的意義」から三年後には「再び大東亜戦争の意義について」（『中央公論』第七九巻第三号、一九六四年三月）という論評が掲載され、そこでもまた、

要するに、国家利益にとってプラスのものは善、マイナスのものは悪であって、国家利益が状況に応じて変化するかぎり、善悪の基準は可変的であり、しかも複数の国家が存在するかぎり、同じ状況のもとで、ある国家にとって善であるものが、他の国家には悪である。

この点は、例えば、第二次世界大戦中のアメリカにとって善玉を意味した「平和愛好国」の一部が、今日のアメリカにとって悪玉を意味する「全体主義国」とされ、逆にかつての悪玉としての「好戦国」が、今日の善玉としての「自由諸国」のカテゴリーに入れられていること（中略）等の事例によって明白であろう。

このように、「善玉」と「悪玉」という言葉を用いて「大東亜戦争」（「太平洋戦争」）について論じているのである。「善玉」と「悪玉」という言葉は一般的な用語ではある[注18]。しかし司馬が重視し読んできた『中央公論』において幾度も「善玉」と「悪玉」という言葉が用いられていること、そして「善玉」と「悪玉」で表現する対象こそ異なるが、論述の方法として酷似していることは看過できない。また上山自身が用いずとも、一九六五年八月の『中央公論』の論評に上山春平の論文が引用されていることも考えれば[注19]、司馬は『中央公論』誌上で幾度も「善玉」と「悪玉」という用語を見出しているはずである。また「善玉」と「悪玉」という言葉は用いられていないが、先に挙げた大井魁は二項対立的歴史観を否定する姿勢を見せている。大井

は「日本ナショナリズムの形成」の中で、「過去を客観視して、普遍原理の一つで裁いてしまうことでもなく、過去を道徳的に正当化して、それによって今の日本国を裁くことでもな」く、「現在の日本の自我に立脚しつつ、過去のみずからの姿を、誇りと恐れと恥をもって、ふりかえる」ことが歴史の問い直しには必要だと論じた。大井魁のこの論は、司馬の二項対立的史観の否定にも通じるものがある。つまり上山春平の戦争観についての論述の方法と、二項対立ではない歴史観の重要性を説いた大井魁の論を融合し、歴史科学の批判へと転化させたのが司馬であったと言えるのである。ここに、『中央公論』の読者でありながら、書き手（作家）として知識を取り入れ自身の中で考察を深化させている司馬の姿が現れている。

五　おわりに

一九六四年、司馬は「私の小説作法」という随筆を書いている(注20)。そこで司馬は次のように述べた。

ある人間が死ぬ。時間がたつ。時間がたてばたつほど、高い視点からその人物と人生を鳥瞰することができる。

この「俯瞰法」は、司馬の歴史の見方として知られている。司馬は歴史小説を書くにあたり資料を渉猟し、『坂の上の雲』のように数年の準備期間を経て作品を書いた。

ビルから、下をながめている。平素、住みなれた町でもまるでちがった地理風景にみえ、そのなかを小さな車が、小さな人が通ってゆく。

そんな視点の物理的高さを、私はこのんでいる。つまり、一人の人間をみるとき、私は階段をのぼって行って屋上へ出、その上からあらためてのぞきこんでその人を見る。おなじ水平面でその人を見るより、別なおもしろさがある。

高みから眺めるという距離感が、司馬にとっては面白く、作品を書くために必要だったのである。

しかし、これまで見てきた一九六〇年代の司馬は、はたして明治や昭和と距離を取り、俯瞰できていただろうか。本稿で検討した日清戦争については、一九六〇年代の段階で司馬なりの見解には到達しており、俯瞰は成功していると言えるかもしれない。しかし、「大東亜戦争」と昭和の社会に対する認識については、必ずしも間合いを取れていないのではないか。昭和という時代に関しては、高所からでなく（高所にいようとしていたのかもしれないが）、水平面に近いのではないかと思われる。一九六〇年代における司馬の動向を見れば、司馬の視点は高み

からのものではなく、読者や論者たちと同じ昭和という平面、同じ高さに立って、小説や随筆などの作品を書いている。そういう、平面の位置にいるとき、司馬にとって『中央公論』という総合雑誌は、羅針盤の役割りを果たしていた可能性がある。論評の是非はさておき、司馬自身がどう考え、刺激を受けたのかという点において、『中央公論』は重要な雑誌であったと捉えられよう。一九六〇年代、羅針盤の針は「大東亜戦争」を指し示していた。しかし、司馬は目に見える形で「大東亜戦争」論争には加わらなかった。その代わりに、「大東亜戦争」に連なる過去の戦争、すなわち日清・日露戦争を考察することにまず着手したと言えよう。これまで見てきた『坂の上の雲』成立までにおける司馬の動向を見れば、一九六〇年代における司馬の作家としての射程は、明治時代に留まるものではなく、また暗い昭和像と固定してしまうのでもなく、明治から昭和までの連続性を意識していたもであった。

後年、司馬は『坂の上の雲』において否定していた二項対立的史観を引き起こし、昭和と明治を対立させるに至る。そして司馬に対するイメージは「司馬史観」に捕らわれるようになる。しかし一九六〇年代の、『坂の上の雲』を書こうとしていた、また書き始めたばかりの司馬には、そのような史観は見られない。善と悪で歴史を語ろうとせず、最新の有識者らの論評に触れ、自身の記憶や葛藤を露見することなく、考えを取りまとめ結晶化させようとしていた。司馬にとって『中央公論』は、歴史小説を書く上での重要な触媒であったと言えるだろう。司馬は昭和を書かなかった（あるいは書けなかった）と言われるが、そうではないと考える。たしかに「昭和」を冠した作品は遺さなかった。しかしながら『坂の上の雲』と『中央公論』とを比較検討することで、明治時代を描き出しながらも「大東亜戦争」に肉薄する司馬の姿が浮き彫りとなるのである。

注1　中塚明『司馬遼太郎の歴史観　その「朝鮮観」と「明治栄光論」を問う』（高文研、二〇〇九年）

2　中村政則『『坂の上の雲』と司馬史観』（岩波書店、二〇〇九年）

3　一九六三年九月から一九六五年六月まで全一六回にわたって連載された。「大東亜戦争肯定論」は連載の途中、二度の休止がある。一度目の休止は第四回と第五回の間、二度目の休止は第一三回と第一四回の間である。司馬が「百年の単位」で「大東亜戦争肯定論」に言及したのは一度目の休止中、一九六四年二月のことであった。

4　司馬遼太郎『司馬遼太郎が語る雑誌言論一〇〇年』（中央公論新社、一九九八年）本書は、一九八五年一一月二五日～二八日に放送されたNHK教育テレビ・ETV8スペシャル「雑誌言論一〇〇年」を採録したものである。

5　雑誌『改造』については後考を期す。

6　日本近代文学館、小田切進編『日本近代文学大辞典　第五巻』（講談社、一九七七年）

7　日本近代文学館、小田切進編　前掲書

8　司馬遼太郎「生きている出雲王朝」（『中央公論』第七六巻第三号、一九六一年三月）

9　林房雄の論旨は「大東亜戦争」を開国時から継続する防衛戦争であったと主張しているために批判も相次いだ。『中央公論』第八〇巻第九号（一九六五年九月）では「特集「大東亜戦争肯定論」批判」という特集が組まれている。

10　司馬遼太郎「明治の若者の気分（「坂の上の雲」連載予告）」（『産経新聞』大阪版朝刊、一九六八年四月一〇日）

11　司馬遼太郎「だけの人間」（『産経新聞』大阪版夕刊、一九六四年三月二六日）

12　成田龍一『戦後思想家としての司馬遼太郎』（筑摩書房、二〇〇九年）

13　成田龍一『近現代日本史と歴史学　書き替えられてきた過去』（中央公論新社、二〇一二年）

14　中塚明　前掲書

15　本論文の『坂の上の雲』の引用はすべて司馬遼太郎全集第二四～二六巻（文藝春秋、一九七三年）による。

16　防衛戦争か侵略戦争かという論で割れるのは、日露戦争以降（大東亜戦争を含む）である。中村政則（前掲書）は「主観的外圧と客観的外圧を区別することなく、いわば日本側の恐怖心（主観的外圧）を強調する」林房雄の「大東亜戦争肯定論」と『坂の上の雲』は同じだ（ただし林房雄と司馬では「大東亜戦争」の解釈については異なっている）と指摘している。しかし司馬は日清戦争を描く段階で「その強烈な被害者意識は当然ながら帝国主義の裏がえしである」ことに気がついており、手放しに日露戦争を防衛戦争として書いたとは考えにくい。『坂の上の雲』の後半を占める日露戦争の問題については稿を改めて考察を行う。

17　林房雄「大東亜戦争肯定論　第六回　日清戦争と三国干渉―『日本の悲壮な運命』」（『中央公論』第七九巻第五号、一九六四年五月）

18　「陸軍悪玉論」といった表現もあることは考慮しなけれ

ばならない。

19　大島康正「大東亜戦争と京都学派―知識人の政治参加について―」（『中央公論』第八〇巻第八号、一九六五年八月）では「もともと先進資本主義国と後進資本主義国のナワバリ争いにすぎぬものを、「平和愛好国」と「好戦国」という善玉か悪玉のたたかいにすりかえた」という上山春平の歴史観が引用されている。

20　司馬遼太郎「私の小説作法」（『毎日新聞』朝刊、七月二六日）

（とどろばる　あさみ／本学大学院博士後期課程）

キーワード＝司馬遼太郎、坂の上の雲、中央公論